

## 凡河内躬恒の表現

—亭子院歌合歌と躬恒集B部所載歌との関連—

西山 秀人

Nishiyama Hidehito

### 要 旨

古今和歌集撰者の一人、凡河内躬恒の和歌表現について、亭子院歌合出詠歌を中心に考察したものである。その結果、躬恒集B部所載歌、とりわけ一類光俊本の四季歌雑纂部春歌群詠との関係が密接であることが指摘された。

キーワード：凡河内躬恒 古今和歌集 亭子院歌合

躬恒集 光俊本

### 一、はじめに

凡河内躬恒は古今集撰者として同集の編纂事業に携わるほか、紀貫之に並ぶ当代の専門歌人として歌合歌や屏風歌を頻繁に詠進して

いる。しかしながら、貫之に比して躬恒の歌風研究は著しく立ち遅れており、和歌表現について具体的に言及したものとしては滝澤貞夫<sup>(1)</sup>、片桐洋一<sup>(2)</sup>氏の論考を見るに過ぎない。近年ようやく平沢竜介<sup>(3)</sup>、藤岡忠美・徳原茂実氏による注釈<sup>(4)</sup>が刊行されるに至ったが、躬恒歌風についての本格的な研究はまだ緒に就いたばかりだといつてよい。

躬恒の現存歌は疑義のあるものも含めて六一九首とされる<sup>(5)</sup>が、その詠歌の殆どを収めた躬恒集からは片桐氏が指摘されるように大量の類似類想歌が見出される。こうした現象は貫之など同時代歌人詠においてもある程度看取される<sup>(6)</sup>が、躬恒歌についてはより顕著であるといえよう。もつとも、躬恒の場合は自詠にとどまらず古今集歌や同時代詠からも大胆な撰取を試みてはいるが、自詠における類似詠の多さは、躬恒の歌作姿勢を考える上でも看過できないものがある。この問題に関しては拙稿<sup>(7)</sup>で若干の考察を試みたところであるが、

本稿では躬恒の詠進歌の中でも、詠作年時が判明し、なおかつ他の自詠との表現的関連が顕著である亭子院歌合の出詠歌に焦点を絞り、躬恒の和歌詠法の具体相について検討を及ぼしてみたい。

なお、躬恒集諸本の分類と構成は、現在のところ、

第一類(1)時雨亭文庫藏定家外題本 A—B

(2)書陵部藏(511・28)光俊本 A—B—C

第二類 内閣文庫藏(201・434)本 B

第三類(1)時雨亭文庫藏本 B—A—問答歌

(2)書陵部藏(501・235)丙本 B—A—問答歌—C

第四類 西本願寺本三十六人集 D—E—漢詩連歌—B—A(後半脱)

第五類 正保版本歌仙家集本、伝西行筆本 A—B(中間脱)—D

のように図式化されている。<sup>(8)</sup> 躬恒集本文の引用に際しては現存最古の写本で部分的には「躬恒自身に由来する資料が生かされている」<sup>(9)</sup> 可能性が強い西本願寺本に拠り、該本不載歌については光俊本以下他本を用いることとするが、家集の組織・構成面にも出来る限り配慮した上で以下の作業を進めることとしたい。<sup>(10)</sup>

## 二、春部所載歌をめぐって

亭子院歌合は延喜一三年(九一三)三月一三日、故后温子の邸宅亭子院において宇多法皇が催した晴儀の歌合で、天徳内裏歌合をは

じめ後世の歌合に多大に影響を与えたものである。当初は仲春一〇番・季春一〇番・夏一〇番・恋一〇番の計四〇番八〇首を番える予定であったが、時間の都合で夏五番・恋五番を省略し、三〇番六〇首の披講にとどめられた。左右の方人頭には宇多皇女誨子・従子内親王がそれぞれ当たり、左の方人には敦慶親王・敦固親王・藤原定方・藤原有実、源宗子、平好風、右の方人には敦実親王・貞教親王・源昇・藤原清貫・兼覽王・きよみち(源清平の誤か)<sup>(11)</sup>など、法皇の血縁・姻戚・近臣が任ぜられている。判者は寵臣藤原忠房が勤める予定であったが、不参のために法皇の勅判となった。作者は法皇以下、躬恒、興風、貫之、是則、伊勢、季方、頼基、雅固、兼覽王らで、事前に詠進された歌を撰んで合わせた兼日題の撰歌合である。作者別の歌数を十巻本で見ると、躬恒二〇首、興風九首・貫之六首・是則四首・伊勢三首・法皇二首・その他一首ずつで、躬恒の歌が最多である点には注目される。<sup>(12)</sup> 躬恒歌数の内訳は十巻本によれば二月六首、三月六首、夏三首、恋五首。当代第一の歌人と目されていた貫之をさしおいての採歌数は、躬恒がかねてより宇多法皇の周辺で活躍していたという事情もあるうが、当代歌壇における躬恒の評価がいかに高いものであったかを示唆していよう。

では春部における躬恒の詠進歌について見てゆこう。

①さかざらむものならなくにさくらばなおもかげにのみまだきみ  
 ゆらむ<sup>(13)</sup> (二月・3、I 50 II 229 III 153 V 71)

二月二番の左歌で、貫之の「山桜咲きぬる時はつねよりも峰の白

雲立ちまさりけり」と番わされ、左歌は「らむ」の重出、右歌は「山」「峰」の同意語重複を理由に持の判定を得ている。ちなみに、家集では二句を「ものとはなしに」、結句を「まだき見えつ」とする伝本が多い。「散ってしまったら再び咲かないというわけでもないのに、まだ咲かないうちから桜花の面影ばかりが目に見えているのだらう」と桜への執着をうたうが、①と表現的に類似する歌としては、

さくらのほなのをちへいぬるをみて  
ちるをみて (I・III) いる (冷甲)

(a) ①いつのまにちりはてぬらむさくらばなおもかげにのみいまは  
にけむ (冷甲・I・II・III) よる (冷甲)

みえつ、(IV 378、I 240 II 25 III 264)

①いつのまにちりはてぬらむさくらばなおもかげにのみいまは  
にけむ (冷甲・I・II・III) よる (冷甲)

見えつ、(I 123)

の一首が挙げられる。(a)は一・二類本ではB部、三類本では上掲C部に位置するが、光俊本(I)のみC部にも重出しており、その本文には揺れが見られる。落花後の残映に注目した暮春詠だが、趣向的にはまだ咲かないうちから面影が見えるとうたった①のほうがまさっていよう。(a)の詠作時期が不明である以上、①との先後関係はにわかには判断し難いが、(a)の上二句が、

を(寛平御時后宮歌合・夏・66)

幾之間丹 花散丹兼 求谷 有勢者夏之 蔭丹世申緒  
イツノマ イツノマニケム ウチハヘテ アリセバナツノ カゲニセマシラ

と類似し、また、下三句が万葉歌の、

高田之 野辺乃容花 面影尔 所見乍妹者 忘不勝裳  
タカマトノ ノノカホバナ オモカゲニ ミエツツイモハ ワスレカネツモ

(新撰万葉集・夏・319)

(万葉・卷八・秋相聞・一六三〇、家持)

かすが野ののべのあさがほおも影にみえつついもはわすれかね  
つも(六帖・六・あさがほ・3894・家持)

や、歌会での競作かと目される隠題歌、

くれのおも  
いつしかとまつゆふぐれのおもかげにみえつ、みえぬことのわ  
びしさ (IV 129、V 250)

くれのおも づらゆき

こし時とこひつつをればゆふぐれのおもかげにのみ見えわたる  
かな(古今集・物名・墨滅歌・1103・貫之)

とも近いことを鑑みると、(a)は先蹤詠に依拠しつつ詠まれた旧作ではあるまいか。もちろん、現時点では確固たる証左を持ち得ない以上、これとは逆の見方もできようかと思われるが、亭子院歌合歌に躬恒歌風の円熟を認めるならば、(a)から①へという流れを想定しておくのが穏当であろう。

さらに①は、延喜五年定文歌合に詠進された旧作、  
やよひのつごもりの日、花つみよりかへりける女どもを見  
てよめる みつね

(b)とどむ とまるべき (V・西行) ものならなくに (冷甲・冷乙・III・西行)

このころか(古今・春下・132/定文歌合4/I 59 II 143 III 162 V 91)

との表現的関連も認められる。(b)は落花をモチーフとしてはいるが、「ものとはなしに(ものならなくに)」を第二句に据えて花を詠じる手法は①と類似する。以上の考察より、①は(a)・(b)を下敷きに詠まれている可能性が強いとみてよく、そこにまだ見ぬ花を面影に

見るといふ新たな趣向を付与することで意外性をねらったものとみることができよう。

② <sup>見(II・IV)</sup>きつつのみなくうぐひすのふるさとはちりにしむめのはなにざりける(二月・5、I 51 II 90 III 78 154 IV 429 V 72)

三番の左歌で、是則の「三千代経てなるてふ桃は今年より花咲く春にあひぞしにける」と番わされ勝を収めるが、作者については異説が多く、新勅撰集(春上・36)では是則、古今六帖(二・1303)では興風とするほか、興風集(I 21 II 6)、是則集(7)にも収められている。是則説はおそらく右歌の作者名を左歌のそれと見誤ったゆえとみられ、興風説は甘巻本が二番右歌の作者名を興風としていふことに起因するものと推察される。十巻本文に従い躬恒の歌と認定してよからう。

さて、②は落花を鶯の古里に見立て、「花の落ちた梅の木ばかりにやつて来ては鳴いている鶯の古里は、散ってしまった梅の花であったよ」と詠じるが、その表現はB部所載の、

(c) <sup>見(II)</sup>うぐひすのきつ、のみなくあをやぎをうしろめたくもをらせつるかな (IV 417、I 166 II 77 III 66)

や、D・E両部に重出する、

(d) <sup>おと(IV・四一)</sup>こゑきけばこひのまさるにひとにく、きつ、のみなくよぶことりかな (IV 318、IV 141)

と関連性が認められる。とりわけ(c)については鶯を詠み込んでおり、②のみならず四類本独自歌の

(c) <sup>むめがえ</sup>きみがよにきすむありすのうぐひすはなきなにはなををらせつるかな (IV 302)

とも近い関係にある。いずれも詞書を欠いているため具体的な詠作事情は知られないが、(c)は青柳に・(c)は鶯に女性をなぞらえ、「をらせつるかな」に恋的な寓意を込めたものとみられる。また(d)も私的な場での詠と推察されることから、これらはおそらく②以前に詠まれた旧作ではあるまいか。そのように考えてみると、②は(c)を念頭に置きつつも、そこに一工夫施すことで旧套からの脱却を目論んだ一首とみてよさそうである。

③ わがこころはるのやまべにあくがれてながながしひをけふもくらしつ(二月・14、I 148 II 59 III 47 V 73)

七番の右歌<sup>(6)</sup>で、貫之の「桜散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞふりける」と番わされたものの、講師の講詠が悪くて運悪く負となった作である。花見遊山をモチーフとした一首であり、表現的には、

うりむるんのみこのもとに、花見にきた山のほとりにまかれりける時によめる

いざけふは春の山辺にまじりなむくれなばなげの花のかげかは(古今・春下・95・素性)

はるのうたとてよめる

いつまでか野辺に心あくがれむ花しちらずは千世もへぬべし(同・96・素性)

あしひきの山どりの尾のしだりおのながくしよをひとりかも  
ねん (人麿集 I 207 / 万葉・十一・2802 或本歌)

からの影響が予想されてこようが、このほか自詠の、

(e) あひおもはぬはなにこゝろをつけそめてはるのやまべにながる  
なごめを  
ぞする(冷甲・I・II・III・冷乙)  
くらしつ (IV 88, I 162 II 71 III 60)

との関連も看過できない。(e)は四類本ではD部、一三類本ではB部に位置する歌であるが、おそらくその表現は、

相不念 妹哉本名 菅根乃 長春日乎 念晩牟  
アヒオモハヌ イモヲモトナ スガノネノ ナガキハルヒヲ オモヒクラサム

相不念 将有児故 玉緒 長春日乎 念晩久  
アヒオモハヌ アラムコユエニ タマノヲノ ナガキハルヒヲ オモヒトシヨク  
(万葉・卷十・問答・1934 / 赤人集にも)

(同・1940 / 同)

といった万葉歌に依拠したものと思しい。また(e)は、B部所載(C部にも重出)の、

花のちるをみて

(e) あひおもはでうつろふいとみるものをはなにしられぬながめ  
もある(II・III)

する哉 (IV 376, I 121 239 II 23 184 III 263)

とも表現的に近しく、しかも(e)・(e)ともに女性を花になぞらえ片思いの恋を暗示しているとみられることから、これらは代作として、あるいは私的な場で詠まれた旧作とみられよう。この推察に立てば、③は(e)を下敷きに、素性歌や万葉歌の表現を散りばめて詠出された歌という位置づけが可能となる。自他を問わず既成表現をコラージュすることにより新たな歌をつくり出そうとする躬恒の歌作姿勢が顕著に現れた一首である。

なお、(e)の二・三句「花に心をつけそめて」は後掲⑦の「花に心

をまづぞ染めつる」と相似た表現であることから、⑦についても(e)からの表現撰取が予想されよう。

歌順は少し飛ぶが、次掲の藤花詠も旧作の表現を転用しつつ新たな歌境を呈したものと見えようである。

④ かけてのみみつぞしのおむらさきにいくしほそめしふぢのは  
なぞも (三月・33, I 56 III 159 V 80)

三月七番の左歌で、是則の「水底に沈める花の影見れば春の深くもなりにけるかな」(34・右)と番わされ、持の判定を得ている。<sup>(18)</sup>

「紫のひともとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」(古今・雑上・367)を踏まえ、「藤の花を見ながら、かの武蔵野のことをひたすら心にかけて思いやっている。いったい紫草の染料で何度染め上げた藤の花なのだろうか」と藤花を賞美したものが、上二句の表現はB部所載の、

(f) かけてのみ、つ、ぞしのおなつごろもうすむらさきにさけるふ  
ちなみ (IV 441, I 189 II 106 III 94)

と合致しており、両者の間には何らかの影響関係が想定される。ちなみに、藤の花を心に「かけて」「しのお」というモチーフ自体は、

「三月つくる日(V・西行)」

(g) あかずして今日のくれなばふぢのはなかけてのみこそはるをし  
今日くれてあずになり(他本)

のばめ (IV 351, I 100 4 III 4 V 35, 内御屏風和歌)

(h) ふぢのはなかけてぞしのおむらさきのふかくしなつになりぬと  
はるを

おもへば (IV 268)

なども含め躬恒が繰り返し用いてきたものであるが、④および(f)はこうした類型に依拠しつつもそれだけに終始せず、武蔵野の紫草を連想させたり、同時代詠には類例のない「うすむらさき」という色彩表現を用いたりするなど各々一節工夫が施されている。ただし、(f)は「夏衣」の歌語に象徴されるように夏歌として詠まれたものであり、「」に咲ける藤波」という表現は旧作の、

家にふちの花のさけりけるを、人のたちとまりて見けるを  
よめる

(f)わがやどにさける藤波たちかへりすぎがてにのみ人の見るらむ  
(古今・春下・120、I 242 II 142 III 266)

に用いられている。おそらく(f)は④に先行する旧作とみられ、その表現を季春題の歌に転用しつつ詠まれたのが④であったと推察されよう。

以上、春部の出詠歌より四首を例に挙げ、躬恒の詠法について考察を及ぼしてきたが、旧作の表現を発展的に踏襲しつつテーマや素材に応じて種々のバリエーションを生み出そうとする躬恒の歌作姿勢を窺い見ることができた。ただ、ここで留意しておきたいのは、歌合歌と表現的関連が認められる(a)(b)(c)(d)(e)(f)(g)(h)の八首のうち、(a)(c)(e)(f)(g)の五首までが一類光俊本ではB部に属しているという点である。しかも、(g)を除く四首についてはB部の根幹をなす四季歌雑纂部に位置している。(a)・(c)・(e)は同部春歌群(I 106~178)、(f)は夏歌群(I 179~198)所載であるが、このほか③・(e)と表現的に近い(e)も同部春歌群に収められており、しかも③までもがA部所載の「延喜十二年三月十八日亭子院歌合に、二月」(I 50~56、III 153

⑤)歌群ではなく、B部の四季歌雑纂部春歌群に置かれている。これらを鑑みると、歌合春部の出詠歌と当該歌群詠との関係は看過できないものがある。如上の現象は上掲の歌にとどまらず、次の例についても指摘しうる(「」内の符号は前節に掲げた家集の内容分類を示す)。

⑤うたたねのゆめにやあるらむさくらばなはかなくみてぞやみぬ  
べらなる(二月・右・16、I 146 II 57 III 45 IV 430)【B】

(i)さくらばなゆめにやあるらんおなじくはまだみぬさきにちり  
ぞしなまし(IV 391、I 138 II 49 III 37)【B】

⑥うつつにはさらにもいはじさくらばなゆめにもちるとみえぼう  
からむ(三月・左・23、I 54 III 157 V 77)【A】II 300)

(j)おきふしておむかひなくう、つにもゆめにもはなのちるをい  
かにせむ(IV 394、I 141 II 52 III 40)【B】

⑦はるふかきいろこそなけれやまぶきのはなにこころをまづぞそ  
めつる(三月・左・31、I 149 II 60 III 48 IV 400)【B】V 79)【A】

(k)春ふかみえださしひちてかみなみのかはべにたてるやまぶき  
のはな(IV 380、I 125 II 27 III 13)【B】

(e)あひおもはぬはなにこ、ろをつけそめてはるのやまべになが  
る(冷甲・I・II・III・冷乙)【D】、I 162 II 71 III 60)【B】

⑧はなみつつをしむかひなくけふくれてほかのはるとやあすはな

りなむ (三月・左・39)

⑨けふのみとはるをおもはぬときだにもたつことやすきはなのか

げかは (同・右・40 / I 127 II 29 IV 382 【B】 V 81 【A】)

(1) 今日くれてあすとだになきはるなればた、まくをしきはなの

かげかな (IV 388、I 132 II 43 III 31 【B】)

⑤は桜の花盛りを一睡の夢に喩えたもので、四類本を除いては家集B部の四季歌雜纂部春歌群内に置かれている。その二・三句の表現は語順こそ異なるものの同歌群所載の(i)に合致しており、両者の影響関係が想定されよう。⑥は夢の中でさえ花が散るのは悲しいと詠じるが、その表現は夢のみならず現実においても散りゆく花を嘆いた(i)に似通っている。なお、片桐氏は⑤・(i)・(j)の三首が家集では近接した位置にある点に言及され、これらが「同趣の発想と同趣の言葉を用いてのテーマの繰り返しである」ことを指摘されている。

⑦も家集ではB部春歌群内に位置する歌だが、その初句は「河津鳴カハツナク甘南備カミナヒ河カハニ陰所見カゲミエテ今香開良武イマカサクラム山振乃花ヤマヅキノハナ」(万葉・卷八・1435 /

新撰和歌にも)を踏まえつつ山吹を詠じた(k)には合致し、また下二句については前引の(e)と類似している。⑧・⑨と(1)との関連についてはすでに拙稿において触れたが、(1)もやはりB部春歌群所載歌であり、家集不載の

(1)くれて又あすとだになきはるの日を花の影にてけふはくらさむ

(後撰・春下・145・躬恒)

とその表現が酷似している。

このように亭子院歌合の躬恒詠においては、春部に限ってみても

家集B部春歌群との関連性が強く認められ、とりわけ一類の光俊本

とは最も密接な関係にある。この現象は躬恒が本歌合歌の詠作に際して拠り所とした旧作が当該歌群に集中していることを示唆しているのではないだろうか。もちろん、当該歌群中に亭子院歌合歌が収められているということは、それ以降の歌も含まれている可能性もあり、上掲関連詠すべてを旧作と即断するわけにはいかない。しかしながら、すでに片桐氏が看破されているように、自詠の表現パターンを駆使しては一首を構成していく躬恒の和歌詠法を考え合わせれば、本歌合歌の詠出に際しても旧作の表現を大いに利用したことは想像に難くない。あるいは、上掲(1)・(1')などは歌合歌⑧・⑨の草案だった可能性も否定できない。これら両詠の「明日とだになき春」に一趣向加え、初夏の到来を「ほかの春とや明日はなりなむ」と逆接的に詠じたのが⑧、また「思ふどちまとゐせる夜は唐錦たたまくをしき物にぞありける」(古今・雑上・864・不知)で知られる(1)の「立たまく惜しき」を反語仕立てに改めたのが⑨であったと推察すれば、歌合歌と家集歌との関係が分かりやすくなる。

いずれにせよ、如上の考察より亭子院歌合歌の詠出に際して躬恒がB部四季歌雜纂部所載歌の表現を撰取している可能性は少なからず存しているものとみられるが、さらに憶測を逞しくすれば、躬恒は当該歌群の原態をなす歌稿等の集成資料を座右に置き、それを参酌しながら歌想を練っていたのではあるまいか。

ちなみに、上記歌群との関連性は夏部所載歌からは窺い得ないが、恋部所載歌については若干の指摘が可能なのである。次節では本歌合恋部所載歌を中心に検討を及ぼしてみたい。

三、恋部所載歌をめぐって

本歌合恋部所載の躬恒詠五首のうち、家集B部四季歌雜纂部所載歌との関連が認められるのは次掲⑩・⑫の二首である。

左持

⑩たれによりおもひくたくるころぞはしらぬぞひとのつらさな  
みたる、(II・V・西行)

西行  
りける (恋・62、II 258 V 86)

右

躬恒

⑪はづかしのもりのはつかにみしものをなどしたくさのしげきこ  
ひなる (恋・63)

恋二番、躬恒歌どうしが番わされている例である。⑩の「Aぬぞ

Bのつらさ(き)なりける」という語法は他の同時代詠には見出せないものであるが、家集ではこれに近い、

(m)①ちりかたにあらましものをむめ山ざくらいのはなまたぬははなのつらき

なりけり (I 126 II 28 III 27)

②ちるにだにあはましものをやまざくらまたぬは、なのそらし  
なりけり (IV 381)

の例が見出される。異同の多い歌であるが、『古今六帖』の本文は「ちるにだにあはましものを山桜またぬは花のつらきなりけり」(六・山桜・4227)のようであり、おそらくこれが原態に近いものである。これに従えば(m)の下旬は係助詞「ぞ」「は」の相違こそあるものの上掲⑩と語法的にはほぼ一致する。ちなみに(m)はB部所載

で、一〜三類本では四季歌雜纂部の春歌群に置かれているものである。⑩・(m)の先後関係は不明であるが、(m)について「かはづなくるでの山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを」(古今・春下・125・不知)を踏まえた上で、「花の盛りはもとより、花が散る時でさえも出会いたかつた」意を込めたものとみれば、まず最初に(m)が詠まれ、そこから下旬の骨格のみを借りて恋歌として詠まれたものが⑩と考えたほうが理解しやすい。やはり⑩も本歌合春部の出詠歌と同様、B部春歌群所載の歌に依拠しつつ詠まれている可能性があるろう。

なお、⑪は当代和歌には所見のない「羽東師の森」が詠み込まれている点に斬新さを見るが、下旬の表現は寛平御時中宮歌合にも見える自詠、

(延喜五年二月十日おほせごとによりてたてまつれるいづ

みの大将四十のがの屏風れ四でう、うちよりはじめてないし  
のかむのとのにたまふうた)

(n)おはらきのもりのしたくさしげりあひてふかくもなつになり  
けるかな (IV 5、I 82 III 143 V 18)

を踏まえていよう。<sup>(21)</sup>右歌は一〜三類本ではA部、四類本ではD部に置かれている。

⑫うつつにもゆめにもひとによるしあへばくれゆくばかりうれし  
きはなし (恋・66)

四番の左歌で「玉藻刈るあまとはなしに君恋ふるわが衣手のかわ



くときなき」と番わされ負となった作である。上二句の表現は『伊勢物語』第九段の「駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」の一首を想起させるが、これに依拠したと思しき歌は、

するがなるうつつの山べのうつつにもゆめにもひとをみでや、み  
なむ（忠岑集IV 52）

うつつにも夢にもあはでかなしきはうつつも夢もあかぬなりけり（貫之集I 640）

など古今集撰者詠に集中している。躬恒には⑫に加え前節⑥の関連歌として掲げた、

(j) おきふしておむかひなくうつつにもゆめにもはなのちるをいか  
にせむ（IV 394、I 141 II 52 III 40）

の例もあり、その他家集からは、

「延喜御時うれへぶみだちてそうせよとおほしくて女ぼうの本につかはしける（III）」

(o) ゆめにだにうれしとおもはうつつにてわびしきよりはなをま

さりなん（I 5、II 198 III 184 V 44）

といった例も見出されることを鑑みると、躬恒好みの表現パターンであったといつてよからう。なお、(j)については上述したようにB部所載、とくに一〜三類本では四季歌雑纂部の春歌群内に存在しているものである。

⑫・(j)の関係を話を戻そう。上述のごとく⑥が(j)の影響下に成ったという推察に蓋然性が認められれば、⑫についても(j)を念頭に置いた上で「うつつにもゆめにも」という句表現をなし得たとみてお

くべきかと思われる。もっとも、当時においては一般化・類型化しつつあった表現であることを鑑みれば、あえて(j)を引き合いに出す必要もないのかもしれないが、これまで述べてきたようにB部春歌群詠との関係を勘案すれば、あながち的はずれな推察とはいえないであろう。

如上の考察より、春部所載歌ほど顕著ではないものの、恋部所載歌についても当該歌群詠との表現的関連が認められた。恋歌でありながら春歌と表現的に重なる部分が多いという現象は、躬恒の表現パターンが当該歌群詠に縮約されていることを示唆しているよう。やはり当該歌群詠は亭子院歌合歌の詠作に際して少なからぬ役割を果たしたとみてよさそうである。

#### 四、おわりに

本稿では延喜十三年三月十三日亭子院歌合における躬恒の出詠歌を取り上げ、その和歌詠法について検討を及ぼしてきた。その結果、全体的傾向として家集B部所載歌、とりわけ一〜三類本の四季歌雑纂部春歌群詠との関係が密接であることが指摘された。上掲諸本の中では一類光俊本との関係が最も深い。如上の現象は亭子院歌合歌の詠作に際して、躬恒が当該歌群の原態をなす歌稿資料の類を参照しつつ歌想を練っていたことを推測させる。また、当該歌群は本歌合入撰歌も四首含んでおり、これは後世における増補とも考えられようが、本歌合に関連する詠草書留の類をそのまま吸収している可能性もないとはいえない。徳原茂実氏は当該歌群を含むI 231までの屏風歌と四季歌雑纂部を第二次成立部と見なし、一類本の根

幹をなす第一次成立部 (I 1-105) の次に付け加えられたものとされるが、以上の考察結果を踏まえれば、第二次成立部は躬恒が和歌詠作の場で活用していた歌稿資料を含んでいる可能性もあろう。

なお、当該歌群詠との関連は亭子院歌合歌に限らず、同年に催された十月十三日内裏菊合の出詠歌、

⑬はつしぐれふりそめしよりきくのはなこかりしえだぞまたそはりける (内裏菊合・13、I 71 III 174 IV 131 V 15)

(D)春さめのふりそめしよりあをやぎのいとのはなだにいろまさりゆく (IV 44、I 145 II 56 III 44 【B】)

をはじめ、

「入きのもとに有 (冷甲・V)」

⑭ゆきかへりはるのやまべをさがたみこのもとごとこころをぞやる (IV 480、I 87 III 135 V 24、延喜十五年齋院屏風歌カ)

⑲あひおもはぬはなにこころをつけそめてはるのやまべになかみくらしつ (IV 88 【D】、I 162 II 71 III 60 【B】= (c))

(F)わがこころはるのやまべにあくがれてながながしひをけふもくらしつ (亭子院歌合・14、I 148 II 59 III 47 V 73 【B】= (3))

花つみ(他本)  
はなみ

⑮うぐひすはいたくなきそうつりがにのべわがつむはな、らなく (IV 349、I 98 II 2 III 2 V 33、内裏屏風歌)

(S)しるしなきねをもなくかなうぐひすのことしのみちのはな、らなく (IV 375、I 120 II 22 III 26 【B】/古今・春下・110)

など、一部の屏風歌においても同様に指摘しうるものである。

しかしながら、亭子院歌合以前の歌合歌においては如上の傾向は殆ど認められない。これは裏を返せば両歌合の頃が躬恒の作歌活動の盛期に当たり、歌作の蓄積が豊富となっていたことを示唆しているのではないか。その蓄積がおそらく躬恒自身の手で歌書的な体裁にまとめられ、作歌の際に適宜利用されていたと推察されるのである。

時代は下るが、元輔集には永観二年(九八四)太政大臣藤原頼忠家の屏風歌詠進に際して、歌題に添う形で先人の屏風歌を集成した手本集と思しき歌群<sup>(25)</sup>が取り込まれている。元輔ほどの歌人でも屏風歌詠作のために周到な準備を施しているのであるから、おそらく他の専門歌人たちも各々の手本集を編んでいたことであろう。そのように考えれば、専門歌人として多くの歌を詠出してきた躬恒が、自詠を部別に集成した手引書を編んでいたとしてもさして不思議ではあるまい。光俊本B部の四季歌雑纂部はその痕跡を最もよくとどめたものではなからうか。この点についてはB部に直接検討の手を加えることで徐々に実態が解明されていくものとみているが、それについては他日を期したい。

(注)

- (1) 「躬恒の歌試論」(小澤正夫氏編『三代集の研究』昭56 明治書院所収、『王朝和歌と歌語』平12 笠間書院所収)。
- (2) 「躬恒 歌作り一面」(森本元子編『和歌文学新論』昭57 明治書院所収、『古今和歌集の研究』平3 明治書院所収)。以下、断りのない限り片桐氏の論はこれによる。

- (3) 『和歌文学大系19 貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』(平9 明治書院)、平沢氏ほか『躬恒集』注釈(一)～(五)(『白百合女子大学研究紀要』三五～三九号 平11・12～平15・12)。
- (4) 『躬恒集注釈』(平15 貴重本刊行会) 注(1)論文参照。
- (5) 屏風歌にみられる類似表現については菊池靖彦氏『古今集』以後における貫之』(昭55 桜楓社)に詳しい。
- (6) 「凡河内躬恒の表現―類歌から見えてくるもの―」(『和歌文学論集古今集・新古今集の方法』平16 笠間書院所収)。以下拙稿についてはこれによる。
- (7) 渡辺泰氏「躬恒集の異本と私家集成の一様式」(『国語と国文学』昭32・9)、『私家集成大成』中古I「躬恒」解題(昭48 明治書院)『冷泉家時雨亭叢書 平安私家集一』(平6 朝日新聞社)、『冷泉家時雨亭叢書 平安私家集九』(平14 朝日新聞社)。
- (8) 『躬恒集注釈』(平15 貴重本刊行会)の解説「三 西本願寺本『躬恒集』(徳原氏執筆)参照」参照
- (9) 参照した各伝本は次の略称をもって示す。一(1)時雨亭文庫蔵定家外題本…「冷甲」、(2)書陵部蔵(511・28)光俊本…「I」、二内閣文庫蔵本…「II」、三(1)時雨亭文庫蔵本…「冷乙」、(2)書陵部蔵(501・235)本…「III」、四 西本願寺本…「IV」、五 歌仙家集本…「V」、伝西行筆本…「西行」。掲出本文はI・II・III・IV・V本は『私家集成大成』中古I(昭48 明治書院)、冷甲本は『冷泉家時雨亭叢書 平安私家集一』、冷乙本は『冷泉家時雨亭叢書 平安私家集九』、西行本は『西行筆躬恒集』(昭57 六興出版)による。清濁は私意。必要に応じて異文本文を傍記したが、二類本の勅撰集増補歌群については対象外としている。なお、躬恒集諸本の歌順異同については滝澤貞夫・酒井修氏『校本凡河内躬恒全歌集と総索引』(昭58 笠間書院)を参照した。
- (10) 源清平誤写説については村瀬敏夫氏『古今集の基盤と周辺』(昭46 桜楓社)参照。
- (11) 『和歌文学辞典』(昭57 桜楓社)、『和歌大辞典』(昭61 明治書院)、萩谷朴氏『平安朝歌合大成 増訂新版 一』(平7 同朋社出版)の解説参照。
- (12) 以下、躬恒集を除く和歌の引用について、勅撰集・私撰集・歌合は断りのない限り『新編国歌大観』、私家集は『私家集成大成』による。清濁は私意とし、一部仮名遣いを改めた箇所がある。また、本文内の引用に際しては適宜表記を改めた。万葉集の歌番号は旧番号とし、歌合本文については『平安朝歌合大成 一』を参照の上、校訂前の十巻本文を【】内に傍記した場合がある。
- (13) 『躬恒集注釈』参照。
- (14) 峯岸義秋氏『平安時代和歌文学の研究』(昭40 桜楓社)は、亭子院歌合歌について「春から夏にかけてのものうい、それでいて感覚的には鮮明な詠嘆は躬恒独自の円熟を示している」と述べている。
- (15) 廿巻本では左右の歌が逆転している。
- (16) 『和歌文学大系』『躬恒集注釈』参照。
- (17) 廿巻本では躬恒歌を勝とする。
- (18) 徳原茂実氏「躬恒集第一類本成立考」(『和歌文学研究』五五号 昭62・11)で示された呼称に従う。
- (19) ②についても一類本ではA部所載ではあるものの三類本ではB部四季歌雑纂部の春歌群に重出している。二類本はB部当該歌群所載である。
- (20) 片桐氏「古今集歌壇と歌語」(『論集古今和歌集』昭56 和歌文学会所収)、『古今和歌集の研究』平3 明治書院所収)では、「大荒木の森の下草」について古今集撰者たちが競って詠んでいた歌句であったことを指摘する。
- (21) 注(19)論文参照。
- (22)

(23) 屏風歌の詠作事情および年時については、藤田一尊氏「平安朝屏風歌

の史的考察―屏風歌作例年表・改訂版（十一世紀中葉まで）―」（『日

本文学論集』21号 平9・3）、田島智子氏「屏風歌注文主の変化―古

今集時代・後撰集時代について」（『中古文学』69号 平14・5）を参

酌した。

(24) 後藤祥子氏「清原元輔試論―屏風歌と歌合と―」（『日本女子大学国語

国文学論究』二集 昭46・2）および『元輔集注釈』（平6・第二版平

12 貴重本刊行会）参照。

〔付記〕

本稿は信州平安文学研究会平成一六年九月例会での発表内容に加筆補

正を施したものである。席上・終了後にご教示を賜った根本智治・柳沢

朗・倉沢希久子氏に心より御礼申し上げます。